

アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザイン

—ノエミ・レーモンドの果たした役割を中心に—

主査 鈴木 敏彦^{*1}

委員 飯田 昂平^{*2}, 北澤 興一^{*3}, 杉原 有紀^{*4}, 齋藤 さだむ^{*5},

レーモンド夫妻の仕事においてノエミが果たした役割は大きい。ノエミは主にインテリアと家具を担当し、椅子、照明、テキスタイル、手すき和紙をデザインしてアントニンの建築に調和をもたらした。それぞれチェコ共和国とフランスにルーツを持ち、アメリカで絵画から建築までを追求した二人はフランク・ロイド・ライトと働き、アメリカから日本に渡り、東京でレーモンド建築設計事務所を開いた。1962年竣工の「軽井沢新スタジオ」は、今なおレーモンド・スタイルを完全に保存する唯一の作品である。所員だった北澤興一氏が受け継いだスタジオおよび所蔵品をデジタルアーカイブ化し、アントニンとノエミが実現したトータルデザインを明らかにした。

キーワード：1) トータルデザイン, 2) 軽井沢新スタジオ, 3) ノエミ・レーモンド, 4) アントニン・レーモンド, 5) 美しい日用品, 6) 暮らしのデザイン, 7) レーモンドスタイル, 8) 麻布笄町の家, 9) 旧井上房一郎邸, 10) ニューホープの家

TOTAL DESIGN BY ANTONIN AND NOEMIN RAYMOND -A Study Focused On Noemi's Role In The Raymond Style-

Ch. Toshihiko Suzuki

Mem. Kohei Iida, Koichi Kitazawa, Yuki Sugihara, Sadamu Saito

Noemi played an important role in the works of the Raymond. Interior design such as furniture, textiles, lightings and Japanese papers that Noemi designed brought harmony to architecture that Antonin designed. They had each roots in Czech Republic and France, then pursued art and architecture in U.S.A. After working with Frank Lloyd Wright, they opened Raymond Architectural Design Office in Japan. "Karuzawa New Studio" which they completed in 1962 is only piece to demonstrate Raymond style in perfection. We digitally archived the studio and materials of "Kitazawa Collection" to reveal the total design of the Raymond.

1. はじめに

1.1 研究の背景

アントニン&ノエミ・レーモンド夫妻は戦後の日本に機能主義をもたらした建築家とデザイナーである。アントニンはチェコ共和国、ノエミはフランス出身だが、アメリカに渡り結婚し、二人ともフランク・ロイド・ライトの元で修行した。帝国ホテルの建設にともない1919年来日し、その後独立してレーモンド建築設計事務所を立ち上げ、数々の日本近代建築史上重要な建築を手がけた。

設計の基本的な考え方はレーモンド夫妻が日本建築から学んだ原理に基づいた。すなわち「レーモンド5原則」とは自然性、直裁さ、正直さ、単純性、経済性の5つを意味し、事務所の所員の間では「レーモンド・スタイル」として定着した。この5原則はノエミが担当した内装と家具の設計にも適用された。したがって、レーモンド・スタイルとはアントニンの建築とノエミのインテ

リアの統合によるトータルデザインと言えよう。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、レーモンド夫妻の協働によるトータルデザインにおいて、ノエミが果たした役割を明らかにすることである。アメリカでの作品紹介においては「自邸（1924年）」から「ニューホープの家（1939年）」までアントニン・アンド・ノエミ・レーモンドのクレジットが記されたが、日本においてノエミは一所員であり^{文1)}、内装と家具のデザインにクレジットがついたことはなかった。これまで夫人のノエミの業績に焦点を当てた研究は国内外を通じて少ない。ノエミが設計した内装と家具に焦点を当て、その実態を明らかにすべきだと考えた。

1.3 研究の方法

本研究の主な対象である「軽井沢新スタジオ」は、

^{*1}工学院大学教授, ^{*2}北澤建築設計事務所所員, ^{*3}北澤建築設計事務所代表取締役, ^{*4}ATELIER OPA代表取締役, ^{*5}Workshop「S+A」齋藤さだむ写真事務所代表

1962年にレーモンドの別荘兼事務所分室として建てられた。1971年にレーモンド夫妻がアメリカに帰国するにあたり、レーモンド建築設計事務所の所員であった北澤興一氏が、家具、調度品を含むスタジオ全体を譲り受けた。また、「レーモンド自邸（麻布笄町の家）」（1951年）にあったアントニンの絵画、陶芸、写真、書簡、スケッチ等がつまった耐火金庫も併せて譲り受けた。この中には『自伝アントニン・レーモンド』^{文2)}の原稿と写真資料も含まれている。それから54年間、北澤氏は自らの使命として託された建築および資料を当時のままの状態で保存、維持、管理してきた。今やこれらの所蔵品は KITAZAWA COLLECTION（以下、「北澤コレクション」と記す）として国際的に認知されている。特に、「軽井沢新スタジオ」の建築とインテリアは、アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザインの傑作として名高い。しかし、「北澤コレクション」の所蔵品は未整理のまま保存されていた。北澤氏の依頼によりアーカイブ化に着手した。

「軽井沢新スタジオ」に通い、離れの建物に保管された絵画、陶芸、フィルム、ネガ、そして母家にある家具、調度品、耐火金庫内の書簡、スケッチ、写真等すべての所蔵品をデジタルカメラで記録し、ノエミに関する資料を分類した。

2. ノエミとアントニンの生涯

2006年にアメリカで開催された展示会と同名の書籍「Crafting a Modern World」^{文3)}が出版された。ペンシルベニア大学の建築アーカイブの学芸員であるウィリアム・ウィタカー氏ともう1名が共著で出版したもので、アメリカではほとんど無名であったアントニンおよびノエミ・レーモンドの仕事に焦点を当てた。筆者は2016年3月にペンシルベニア大学を訪ね、ウィタカー氏と意見交換を行った。ノエミの果たした役割は大きいこと、そして建築の歴史においてアントニンとノエミの位置づけを強調していきたいという点で合意した。

「レーモンド夫妻がこれまで無名であった理由は、どちらもアメリカ生まれではなく、また、1930年代からの活動の拠点を日本に置き、作品は日本、インド、ペンシルベニアに散在しているからである。しかしフランク・ロイド・ライト、イサム・ノグチ、ブルーノ・タウト、ジョージ・ナカシマといった20世紀を代表する芸術家と交流しており、レーモンド夫妻の作品はヨーロッパのルーツを世界各地の固有の伝統技術と組み合わせている点で国際的な価値がある」とウィタカー氏は言う。本章では、ウィタカー氏の著書から年表を抜粋、翻訳した。ノエミとアントニンの生涯を表2-1にまとめ、写真2-1に1914年のアントニンとノエミの姿を示す。

表2-1 ノエミとアントニンの年譜

1888年

5月10日、アントニン・ライマン（Reimann）は、ボヘミアの産業都市クラドノ（現在のチェコ共和国）に、母ルゼナと父アロイの間に生まれる。2人の姉妹と4人の兄弟の三男だった。アロイはユダヤ人で、広場に店を構えていた。ルゼナの家族は近郊の町レンコフに1860年から住んでいた。

1889年

6月23日、ノエミ・バーネサンはマリイとアルフレッドの一人っ子としてフランス、カンヌに生まれる。母マリイはジュネーブのカルビン主義者で、先祖には哲学者のジャン・ジャック・ルソーがいる。父アルフレッドはマルセイユの古いユグノー家出身で、銀行家だった。1982年に父が無くなり、母に育てられる。

1899年

3月、ノエミの母マリイは、サバティカルにてジュネーブに滞在していた言語教師でアメリカ生まれのフランス人、フランシス・エルベート・ブルックスと再婚した。

1900年

ノエミの義父フランシスは母マリイとノエミをニューヨークに連れていき、モーニングサイドハイツイ20丁目のホランスマン学校で職を得た。フランシス一家は、学校から近い114通り600西に住んだ。ノエミは学校に入学し、漫画とスケッチの才能を示す。また、将来歴史学者となるタルボット・ハミリンと共に学校のイヤーブック、ホラス・マナキンを編集する。その頃、アントニンはクラドノのレアルカスクールに入学する。自然科学と技術を強調した先進的な小中学校である。同年、建築家ジャン・コテラがフランク・ロイド・ライトの本を出版する。

1903年

アントニンの母、ルゼナがクラドノにて逝去。続いて父の店は銀行の倒産により閉鎖。一家は1905年にブラハに引っ越す。父は再婚し、セールスマンとして雇われる。アントニンはブラハの旧市街のレアルカ学校に入学。

1906年

アントニンはブラハにあるチェコ工科大学に入学。建築史家ヨセフ・シュルツ、建築デザイン教授ジャン・コウルカに学ぶ。

1907年

ノエミはコロンビア大学の教員養成大学に入学し、2年間ファインアートを専攻する。ジョン・デューイや日本美術に強く影響を受けたアーサー・ウェスリ・ダウらの指導を仰ぐ。

1909年

ノエミはパリに旅行し、エコール・デ・ラ・グランデ・ショウミエールにて油絵を学ぶ。彫刻家セント・クレア・ブレッソンと一生の友達になり、神知学を学ぶ。

1910年

1月、アントニンは建築のトレーニングを終え、アメリカ渡航の準備をする。7月18日、ノエミはパリからニューヨークに汽船シカゴ号で戻る。グラフィックデザインのスタジオを104通り西の126番地に開き、劇場のポスター、広告やイラストレーションを手掛ける。7月22日、アントニンはニューヨークに商船アトランタ号で到着。10月20日から、アントニンは3年半キャス・ギルバートのオフィスに雇われる。同僚にはレンダラーのヒュー・フェリスがいた。ギルバートのオフィスにいる間、アントニンはワールワースビル、セントルイスとデトロイトの公立図書館、ブルックリンのオースティン・ニコルズ会社倉庫を設計した。

1912年

アントニンはリンカーン・スクエア・アーケード・ビルにあったインディペンデント芸術学校にて1913年まで油彩を学ぶ。この年、ノエミは8番街939のファンディック・スタジオ・ビルにあった店舗を借りる。秋にはノエミの水彩画を含めた展示会がシカゴ・アート・インスティテュートで開催された。

1914年

4月、アントニンはニューヨークを離れて、絵を描くためイタリアに滞在。南イタリアをめぐる、ローマの丘の街アンティコリ・コッラードにスタジオを構える。この間、北アフリカのアルジェとチュニスを訪れる。7月28日にフランツ・フェルディナント大公が暗殺され、第一次世界大戦の宣戦布告となったため、アントニンはニューヨークに戻る決意をする。

ノエミは8月15日から30日まで母と異父妹のジャネットと旅行に出かける。ナポリからニューヨークに向かうサンジョバンニ号の船上でアントニンと出会う。アメリカに到着後、アントニンはニューヨークのグリニッジビレッジのガーデンスタジオをフランシス・パーキンスとポール・ウィルソンから借りる。9月から12月にアントニンはキャス・ギルバートのオフィスに戻り、ノエミは広告とグラフィックの仕事に戻る。12月15日、アントニンとノエミはニューヨークで結婚式を上げる。ヒュー・フェリスがベストマンを務めた。

1915年

1月、アントニンは建築の仕事をやめフルタイムで絵を描く。12月、ノエミの親友セント・クレア・ブレッソンがミリアム・ノエルに「フランク・ロイド・ライトがアントニンを雇えるか」と手紙を書く。ライトは同意する。

1916年

2月8日、アントニンはアメリカ国籍を得る。3月17日、ウィスコンシン

ング・グリーンのタリアセンにて、ライトと帝国ホテルの支配人の林愛作が帝国ホテル設計の契約を交わす。3月から5月、アントニンはニューヨークの建築家、ハロルド・ファン・ビューレン・マゴニグルのオフィスで働く。5月から12月、アントニンとノエミはタリアセンで暮らし働く。ライトがデザインしたタリアセンをアントニンとノエミが木版画にしてノエミが彩色する。アントニンはアメリカンシステム・ビルトハウスを設計し設計料を得る。12月28日にライトは日本に渡る。

1917年

1月、レーモンド夫妻はニューヨークにて、アパート兼スタジオを144番街西454番に立ち上げる。3月12日、アントニンは最初の仕事を受注する。85番街とブロードウェイの間にあるガリック・シアターのリノベーションである。アントニンはAIAジャーナルにてデザインに関する最初のエッセイを発表する。4月6日、アメリカがドイツに宣戦布告。アントニンは徴兵に登録し、12月7日にアメリカ陸軍に入隊。

1918年

7月5日、大使館付き陸軍武官補佐としてスイスのジュネーブの諜報機関の遠征軍の少尉となる。10月に駐屯地に着任。

1919年

3月5日、ノエミはヨーロッパに旅行し、ジュネーブでアントニンに合流。9月2日、アントニンは除隊の手紙を受け取り、ニューヨークにノエミと戻る。11ヶ月の日本滞在から戻ったばかりのフランク・ロイド・ライトとワシントン・スクエアのアパートで会う。ライトはレーモンド夫妻と一緒に日本に戻って帝国ホテルの現場監理の仕事をしようと説得する。11月22日、アントニンはシカゴでライトの部下のシンドラーに会い、オークパークに行き、ライト監修のロスの劇場のドローイングを手伝う。日本出発に向けて、ノエミはニューヨークを片づける。12月10日、ノエミとアントニンはシカゴで会う。12月16日、ノエミ、アントニン、フランク・ロイド・ライト、マリyam・ノエルはシアトルから横浜に向けて諏訪丸で出発し、12月31日に到着する。

1920年

アントニンとノエミは東京にてライトと帝国ホテルの宴会場、ベッドルーム、劇場を設計する。インド人陶芸家のグルチャラン・シングの紹介で柳宗悦、バーナード・リーチ、濱田庄司と出会う。前年末に火災で崩壊した帝国ホテル別館が4月に完成する。6月にライトはアメリカに出发し7月にタリアセンに戻る。アントニンは東京クラブ、東京ゴルフクラブの会員になる。

1921年

1月、ライトが東京に戻るとアントニンは個人の設計事務所を作りたいと告げる。アントニンは引き続きライトの仕事をしたかったが、2月8日に解雇される。ルドルフ・シンドラーやリチャード・ノイトラが代わりに雇用され、アントニンとノエミは帝国ホテルから品川区の小さな和風建築の家に移る。12月、ノエミのデザインに関する初エッセイ「Tokyo's Hermit Crabs: Our Artistic Immorality and Decorative Barbarity」がファアーイスト誌に掲載。

1923年

9月1日、関東大震災が発生。11月、ノエミはアメリカに旅行し、ニューヨークに12月7日に到着。東京のアメリカ大使館の設計についてマゴニグルに関係者と積極的な議論を行う。

1924年

2月、後にアメリカ大使公邸となる敷地の横にアントニンは自邸を設計する。4月、ノエミはニューヨークから日本に出发。8月、ノエミの義父、フランシス・エルバート・ブルックスがマサチューセッツで自殺。

1925年

2月19日、聖路加病院でアントニンとノエミの最初の子供が生まれるが4日後に死亡。9月、アントニンはワシントンにて東京のアメリカ大使館の設計の契約を交わす。11月、日本に帰国。

1926年

1月、ノエミは出産のためにニューヨークに戻る。3月レーモンドの息子、ジャンフランソワがニューヨークのスローン大学で生まれる。ニックネームはクロード。6月、ノエミとクロードが横浜に到着。家族で完成直後の「霊南坂の家」に住む。

1927年

前年にアントニンのパートナーを務めた建築家が辞め、社名をアントニン・レーモンド・アーキテクトと名乗る。

1928年

東京芸術大学の学生の吉村順三がレーモンドスタジオで働き始める。

1929年

ノエミの母マリーがニューヨークにて逝去。

1930年

アントニンは丸の内八重洲ビルに事務所を移動。パリでル・コルビュジエと2年間働いた前川国男が帰国しレーモンドの事務所に入所。

1931年

「アントニン・レーモンドの作品集」が『建築時代』の19巻として出版。「レーモンドの家」を洪洋社から出版。吉村順三が正式所員となる。

1932年

アメリカ大使館が東京にて完成。9月、レーモンド一家は4か月の世界旅行に出发し、ロサンゼルスに到着。ルドルフ・シンドラーに会い、シンドラー設計の家、リ

チャード・ノイトラ設計の家を訪ねる。サンタフェ、シカゴ、タリアセン、ニューヨークを巡り、パリでノエミはフランス大使館のための家具を選ぶ。プラハ、ジュネーブ、スエズ運河、スリランカを経て日本に帰国。

1933年

「軽井沢新スタジオ」を竣工。5月3日、ブルーノ・タウトが来日。

1934年

4月2日、ジョージ・ナカシマを紹介する手紙がアントニンに届く。6月、レーモンドの「葉山海の家」をタウトが訪ねる。9月3日、高崎の少林山達磨寺にいるタウトをノエミが訪ねる。

1935年

アントニンが「アントニン・レイモンド作品集1920-1935」を城南書院から出版。アントニンとノエミのエッセイ「日本の住居について (On Japanese Residences)」を掲載。その翻訳がチェコのジャーナルに掲載される。10月、ノエミが「Some random thoughts on 'Interior Decoration'」を『建築知識』に掲載。11月、小川洋吉がノエミの家具とテキスタイルのデザイン展を銀座のカネボウで開催。ノエミは満州に行き、北京で義理の妹ジャネットと、その夫でアメリカ大使の第三秘書のジョン・アリソンに会う。

1937年

7月20日、レーモンド建築設計事務所は株式会社になり、アントニンやノエミを始め吉村順三らが株主となる。

1938年

1月、レーモンド一家は上海、香港、アンコールワットを経て、フランス領インドのボンディシェリに移りゴルコンドドミトリで過ごす。アントニンの2冊目の本「アーキテクチュラル・ディティールズ」が東京にて出版。7月、一家はマルセイユに向けて出発し、ジョージ・ナカシマをゴルコンドプロジェクトの担当として残す。アントニンは本の宣伝でプラハを訪問。その後一家はパリとロンドンを訪ね、建築の本の代理店を訪ねる。

1939年

1月、アントニンとノエミはニューヨークにオフィスを開く。ロックフェラーセンターの裝飾芸術工芸ギャラリーで、アントニンは日本とインドにおける作品展覧会を開催。3月、一家はアメリカのニューホープに150エーカーの農地を購入する。

1940年

3月、「ニューホープの農場」を完成。5月、吉村順三が訪れ、その後14か月をレーモンド一家と過ごす。

1941年

一家はニューヨーク近代美術館の「オーガニックデザインの家具コンペ」でプリント布地のカテゴリーで入賞、「ワンルームのアパートのための家具」で佳作。9月、ノエミの受賞作の布地はサイラス・クラーク社から少量発売になる。7月、吉村順三は日本に戻り東京のレーモンド事務所を閉鎖する。

1943年

レーモンド一家の援助で、ジョージ・ナカシマとその家族がアイダホ収容所から解放され、ニューホープの農場に移り住む。

1945年

第二次世界大戦が終結、マッカーサーによりアメリカが日本を占領。

1947年

アントニンの「アーキテクチュラル・ディティールズ」がアメリカで出版される。

1948年

10月、アントニンは日本に2か月半滞在。リーダーズ・ダイジェストを建設する土地を選び、また、麻布に自邸兼事務所を建設する場所を見つける。吉村順三と杉山雅則にスタンダード石油の社宅の指示を残し、アントニンはアメリカに戻る。

1949年

10月、アントニン、12月末にノエミが日本に来る。リーダーズ・ダイジェストに一時的に事務所を開く。

1950年

一家はフィリピンを訪ね、セントジョセフ教会の裝飾の打ち合わせを行う。アメリカ経由で日本に戻る。

1951年

レーモンドは事務所をアメリカ大使館にあるバラックに移す。イサム・ノグチがリーダーズ・ダイジェスト東京支社のランドスケープのために働く。4月、ノエミはニューヨークにひと月滞在し、ニューヨーク近代美術館にて、ノエミが選んだ日本の高品質な工芸品の展覧会を開催。戦後の難しい時期にアメリカに市場を開拓しようとする。5月、リーダーズ・ダイジェストを竣工。

1952年

4月、「レーモンド自邸」（麻布笄町の家）を竣工。21年間住む。アメリカによる日本占領が終了。5月、アントニンとノエミはアメリカを訪問。12月、レーモンド建築事務所が「1951-1952年のインテリアと家具展」を高島屋で開催。アントニンはリーダーズ・ダイジェスト東京本社の設計で建築学会賞を受賞。

1953年

アントニンとノエミはアメリカ、メキシコ、ヨーロッパを訪ね、ニューヨークの近代美術館にて、日本家屋と庭を建設中の吉村順三に会う。

1954年

4月、日本に帰国。

1956年

アントニンとノエミはニューヨークに住む。

1957年

9月、ノエミが東京に戻る。「レーモンド自邸」に窯を設置。

1960年

世界デザイン会議の一環で、アントニンと丹下健三がラジオで対談。9月、アントニンとノエミはアメリカ、スペイン、ポルトガル、フランス、スイス、イタリア、ギリシャ、トルコを訪ねる。

1961年

群馬音楽センターを高崎に竣工。

1964年

アントニンは勲三等旭日中綬章を授与される。

1965年

5月、南山大学の設計で日本建築学会賞受賞。

1967年

アントニンは「私と日本建築」（三沢浩訳）を鹿島出版社から出版。

1970年

アントニンとノエミはアメリカ、アイルランド、フランス、スイスを巡る。10月、アントニンが改装を手掛けた銀座の松坂屋デパートで「アントニン・レーモンド」展覧会を開催。期間中に「自伝アントニン・レーモンド」を鹿島出版会より出版。

1972年

8月、アントニンとノエミはアメリカに戻る。

1973年

1月、アントニンは東京に戻る。英文の自伝を出版。6月、アントニンとノエミは日本を去り、スタジオが完成したニューホープに戻る。アントニンとノエミは正式に引退する。

1974年

7月、井上房一郎、岡本太郎、前川国男、吉村順三が企画したアントニンの絵画の展覧会が、銀座と高崎で開催される。

1976年

10月25日、アントニンはペンシルバニアの聖マリー病院にて88歳で逝去。東京の聖アンセルム教会にて11月10日、「ニューホープの農場」にて11月21日に葬儀が行われる。

1980年

8月19日、ノエミはニューホープにて91歳で逝去。



写真2-1 1914年のアントニンとノエミ 注1)

ニューヨークのグリニッジビレッジのフランシス・パーキンスのガーデンスタジオにて。同年12月15日、アントニンとノエミはニューヨークで結婚式をあげる。

3. アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザイン

3.1 トータルデザイン

アントニンは建築家としてのキャリアを積む中で絵を描いた。ノエミはイラストや絵画に始まり、アントニンとの結婚後はテキスタイルや家具をデザインし、建築の設計に貢献してきた。二人は共同でオフィスビル、個人住宅、社宅、大学、教会、音楽堂だけでなく、家具、テキスタイル、グラフィックデザインを手がけてきた。一つの建築の中でプロダクトに至るまで広範囲にデザインすることを本研究ではトータルデザインと呼ぶ。大量生産が行われる前の時代、建築家は自ら家具をデザインし、取手や花瓶やカトラリー等を職人に作らせた。結果として建物とインテリアおよびランドスケープの調和が実現した。トータルデザインを実施した同時代の建築家として、ドイツのヴァルター・グロピウス（1883-1969）、スウェーデンのグンナール・アスプルンド（1885-1940）^{文4)}、オランダのヘリット・リートフェルト（1888-1964）^{文5)}、フィンランドのアルヴァー・アールト（1898-1976）、フランスのジャン・プルーヴェ（1901-1984）^{文6)}、デンマークのアルネ・ヤコブセン（1902-1971）^{文7)}などが挙げられる。

アントニンは自伝^{文2)}において自分達の仕事について次のように述べている。

「想像力を常に高く保ち、真の統一を果たすために、建築家はすべての関連する美術、工芸、絵画、彫刻、陶芸、テキスタイルデザイン、家具、調度、照明器具や庭園、環境を含めて、まじめに習熟し自分を整える必要がある。ノエミと私は今も昔もここにあげたすべての調整と統一のために身をついやし、わずかながらは音楽も加えてきた」

アントニンが文中でノエミに触れたことを強調しておきたい。アントニン自身にはノエミと協同している意識があった。しかしこれまでアントニン・レーモンドの名の元に世に出た作品のほとんどは、建築家アントニンの仕事とみなされることが多かった。その理由には女性の仕事ぶりに焦点が当たらない時代背景がある。アントニンの死後、1979年12月の第34回国連総会において「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が採択された。そしてノエミが逝去した1980年に国際婦人年が始まった。男女共同参画が提唱される現在において、ノエミが果たした役割を改めて明らかにしたい。

3.2 アントニンとノエミの役割分担

アントニンは本を出版しているが、ノエミは幾つか寄稿した文章をのぞき、自身の意見を公的に記していない。よって、ノエミの人物像については、1962年から1971年にレーモンド建築設計事務所に勤務した北澤興一

氏の証言を参考にした。2014年9月21日、軽井沢新スタジオにて、北澤氏にインタビューを実施した。^{※8)} レーモンド夫妻の役割分担についての発言を以下に抜粋する。

「建築の意匠とデザインはミスター（編集注：アントニン）、インテリアと家具はミセス（編集注：ノエミ）の担当です。あまりにも綺麗に別に分けているから、レーモンド（編集注：アントニン）に聞いたら、『夫婦で一緒に働くには、自分の領域をはっきりと区別しないと長続きしない。かなり最初から2つに分けた』と言っていました。お互いに尊重した間柄でずっと進めていて、デザインと色彩に関しては、ミセスのアイデアを採用する姿勢でした」

アントニン自身は自伝^{※2)}で建築とインテリアについてこう述べている。

「外部と内部は一体化したものであり、したがってインテリアデザインは、技術と同様、建築家の領域を十分に占めるべきものである」

このように、アントニンはインテリアデザインの重要性を良く理解した上で、インテリアデザイン、家具、調度品のデザインをノエミに託していたと考えられる。また、アントニンは、共同設計にノエミが1954年から貢献したことを自伝^{※2)}で以下のように述べている。

「山下邸（1954年）、西園寺邸（1955年）、ヒョース邸（1956年）、ケステンバウム邸（1959年）をはじめとして現在に至るまで、その後の住宅はほとんどノエミがデザインしたものといっても偽りはない。おそらく最も成功したのは、軽井沢のジェームズ・アダチの別荘（1966年）であろう。家そのものが劇的な環境とうまく融けあっている」

この記録に北澤氏は同意した。「ジェームズ・アダチの別荘」（足立別邸）は「軽井沢新スタジオ」で設計したプロジェクトで、「もともとノエミの友人だった足立夫人のために始めた作品」と述べた。

4. 「軽井沢新スタジオ」

4.1 レーモンド・スタイルの背景

レーモンド夫妻は1962年に「軽井沢新スタジオ」を自らの別荘と夏の間の事務所として使うために建てた。アントニンの建築とノエミの内装設計にレーモンド5原則を適用し、完成した代表作のひとつである。このレーモンド・スタイルの原型は、「レーモンド自邸（麻布笄町の家）」（1951年）に見られた。この住宅の写しとして作られたのが、現在、高崎市美術館が所蔵する「旧井上房一郎邸」（1952年）である。井上氏が腕利きの大工をレーモンドの自邸に派遣し、実測して同様の建築を高崎市に完全に再現した。「レーモンド自邸」で用いた足場丸太の代わりに、地元の榛名山で採った磨き丸太を用い

て、「挟状（はさみじょう）トラス」構造で構成している。「レーモンド自邸」は1973年に解体されたため、「旧井上房一郎邸」はレーモンド・スタイルを伝える貴重な場となっている。内部にはノエミがデザインした家具、什器、造作が数多く残され、後の「軽井沢の新スタジオ」でも見られる椅子や、「レーモンド自邸」と同様の照明やテーブルがある。^{※6)}

表4-1に建築概要、図4-1に配置平面図、図4-2に断面詳細図、写真4-1に1962年の外観写真、写真4-2に2014年の外観写真、写真4-3に2014年の内観写真を示す。

表4-1 建築概要

建物名	軽井沢新スタジオ
所在地	長野県佐久群軽井沢町
設計	アントニン&ノエミ・レーモンド
施工	白石建設
竣工	1962年
構造	木造平屋建て、足場丸太挟状トラス架構
規模	敷地面積（約2,640平米）、建築面積（144,583平米）、延床面積（141,717平米）
主な外部仕上げ	屋根（鉄板28mm 瓦棒葺きOP、元はその上に茅葺き）、壁（杉板堅羽目板張り）、建具（木製、一部芯外し）
主な内部仕上げ	天井（杉化粧野地小屋組現し）、壁（ラワンロータリーベニヤ厚6mm 真鍮釘打ちCL）、床（ブナフローリングCL、畳）
設備	暖房（暖炉）



図4-1 軽井沢新スタジオ配置平面図



写真4-1 軽井沢新スタジオ 1962年 注1)



写真4-2 軽井沢新スタジオ 2014年 注2)

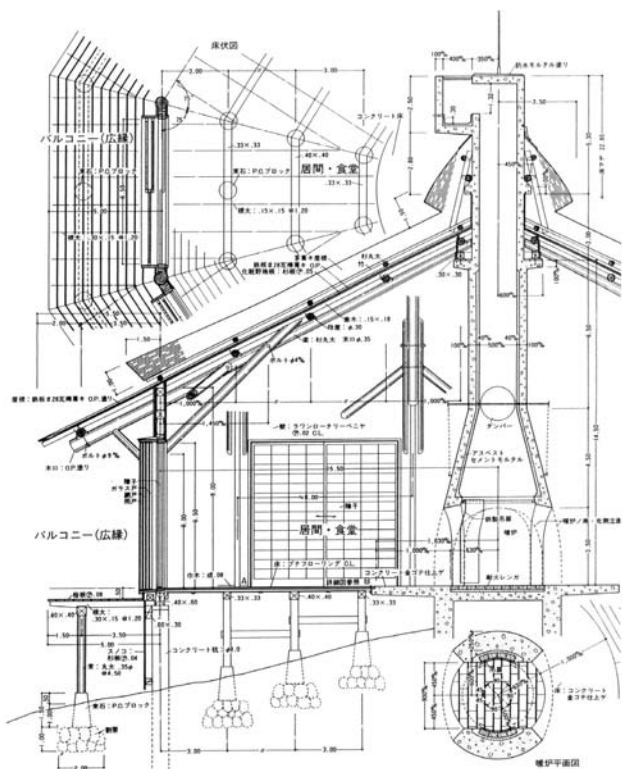


図4-2 軽井沢新スタジオ断面詳細図



写真4-3 軽井沢新スタジオの内観 2014年 注2)

隣家に住む土屋恒夫氏は、祖父の代からこのスタジオの管理を手伝っている。当時の経緯を尋ねたところ次のように述べた。「ノエミがひとりで散歩する途中にこの場所を見つけた。そして小高い場所に登り、しばらく草むらに寝転がって空を眺めながら、ここを敷地に決めた。そしてノエミは祖父の仲介で地主から土地を取得し、予定通りの場所に寝室を設計した」このエピソードから土地を見つけて基本構想を主導的に練ったのはノエミとわかるが、アントニン(注2)で自分が見つけたように述べている。

「かつて、ル・コルビュジェが剽窃であるといっけなくなった、最初のスタジオは、軽井沢ゴルフコースのほぼ中間にあり、私が自分のために建てたものの中で最も楽しんだ建物であった。戦争直前、私は滞日生活が終わったと考えて、不幸にも売却してしまった。それを継いだ所有者は例の野蛮な方法で、その美しさを壊し、その週末を迎えたのである。私はそのゴルフコースの外れで、田園や、森や、山を広く望むやや小高い所に、小さな土地を見つけた。第一の考え方は12辺形のスタジオが、暖炉を中心とするものであった。建物は大地を覆い、その高い部分には地平線をぐるりと見渡せるすばらしい眺めをそなえた、小さな寝室を兼ねたスタジオが占めることになった」

北澤氏は、1962年から1971年にレーモンド設計事務所に勤務し、完成したばかりの「軽井沢新スタジオ」にて毎年7月の第1金曜日から9月の第1金曜日までをノエミとレーモンドと共に過ごした。ここでは予めクライアントの決まった案件について、企画設計と基本設計をするのが常だった。レーモンド夫妻の様子を、北澤氏は次

のように述べた。

「朝の食事が終わるとレーモンド（編集注：アントニン）はここで製図板を乗っけて、ミセスは奥の主寝室にベッドを押し込んで組み立て式の製図板を立てます。ミセスが時々やってきてスタッフに興味深そうにちょっかいを出すとミスターは怒ります」^{文8)}

4.2 維持と管理

1973年にレーモンド夫妻がアメリカに帰国するにあたり、レーモンド建築設計事務所を独立することになった北澤氏は「軽井沢新スタジオ」を買い取り、家具、調度品および資料の入った耐火金庫を譲り受けた。北澤氏は当時と変わらない状態を維持すべく手を入れながら使用している。避暑のための別荘なので5月から10月までの間に利用し、それ以外の期間は土屋氏に管理を依頼する。庭の朽ち木は切り倒し、竹垣は定期的に交換しなくてはならない。外壁にはキツツキが穴をあけ、スズメバチが巣を作ることがある。室内では電球が切れれば特注で制作し、壁板が破損すればロータリーベニヤ材のデッドストックを探し出して補修する。2014年にベッドカウチのカバーのテキスタイルが傷んできたので、テキスタイル作家に複製を依頼した。このように家具に補修を重ね、40年以上維持と管理を続けてきた。

5. 「北澤コレクション」のノエミの作品

北澤氏の依頼により、2013年から「軽井沢新スタジオ」に通い、2014年から2016年にかけて所蔵品をデジタルカメラで記録した。離れの建物に保管された絵画、陶芸、フィルムのネガ、母家にある家具、調度品、耐火金庫に入っていた書簡、スケッチ、写真等の所蔵品の総数は5679点だった。なお、ここには2006年からペンシルベニア大学に貸し出している設計図や写真や椅子など12点は含まない。分類と点数を以下に記す。

家具・インテリア（43）、絵画（289）、陶器（14）、イラスト（15）、テキスタイル（3）、スケッチ（126）、ネガ（118）、図面（224）、紙資料（860）、パネル（3）、写真（3984）。この中でノエミに関する資料は779点を占める。家具・インテリア（43）、イラスト（4）、貼り絵（1）、写真（731）である。

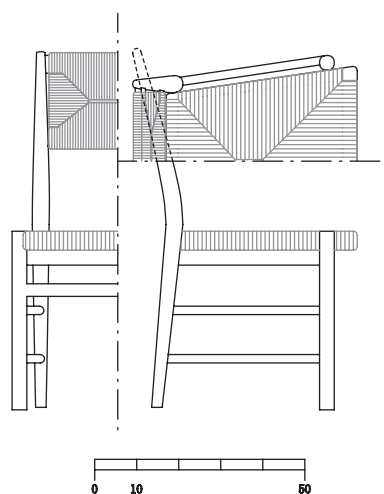
本章では、北澤コレクションの中からノエミの作品を、「家具・プロダクト」、「鋳鉄・金属加工」、「イラスト、貼り絵」、「テキスタイル」、「手すき和紙」、「写真」の6つのカテゴリーに分類して報告する。

5.1 ノエミの家具

ノエミの手掛けた椅子は21脚、ベッドカウチが4台、テーブルが7台ある。表5-1に家具の種類と場所、図5-1に実測図例、表5-2に家具とプロダクト一覧を示す。

表5-1 ノエミの家具の種類と場所

スタジオ	製図台（3台）、三角椅子（5脚）、ベッドカウチ（1台）
居間	ベッドカウチ（1台）、イーgerチェア1（1脚）、イーgerチェア2（1脚）、肘掛け椅子（1脚）、ローテーブル（1台）
キッチンカウンター	丸椅子（4脚）、い草編み丸椅子（1脚）
食堂	ダイニングテーブル1（1台）、ダイニングテーブル2（1台）、アントニン愛用食卓椅子（1脚）、食卓椅子（6脚）、長椅子（1脚）
客間	組立座卓（1台）
寝室	ベッドカウチ（2台）、い草編みベンチ（1脚）



W/D/H/SH : 515/540/854/425
重さ : 5.7kg
素材 : オーク、い草
製作 : 株式会社高島屋工作所



図5-1 アントニン愛用食卓椅子の実測図 注2)

表5-2 ノエミの家具とプロダクト一覧



製図台
W/D/H : 1212/910/807
素材 : オーク



三角椅子
W/D/H : 390/340/460
重さ : 2.23kg
素材 : オーク



ベッドカウチ
ベッド W/D/H : 1820/910/390
収納 W/D/H : 1820/270/290
素材 : オーク



ペンダントライト
素材 : 鉄



イージーチェア 1
W/H : 725/870
重さ : 14.59kg
素材 : オーク、い草



イージーチェア 2
W/H : 725/870
重さ : 14.59kg
素材 : オーク、い草



ローテーブル
W/D/H : 1015/1015/360
素材 : オーク



折戸
素材 : 和紙



丸椅子
W/D/H : 305/305/545
重さ : 2.35kg
素材 : オーク



い草編み丸椅子
W/D/H : 340/340/520
重さ : 2.85kg
素材 : オーク、い草



ダイニングテーブル 1
W/D/H : 970/910/725
素材 : オーク



ダイニングテーブル 2
W/D/H : 970/1210/725
素材 : オーク



アントニン愛用食卓椅子
W/D/H/SH : 515/540/854/425
重さ : 5.7kg
素材 : オーク、い草



食卓椅子
W/D/H/SH : 520/520/800/425
重さ : 5.34kg
素材 : オーク、い草



い草編みベンチ
W/D/H : 1205/330/395
素材 : オーク、い草



暖炉用品
素材 : 鍛鉄



肘掛け椅子
W/H : 613/702
重さ : 6.59kg
素材 : オーク、い草



長椅子
W/D/H : 1705/756/890
素材 : オーク、い草



組立座卓
W/D/H : 737/440/338
素材 : オーク

ノエミがデザインした椅子とイーgerチェアとベンチの座面はすべてい草編みで出来ている。一般的にはペーパーコードが用いられるがノエミはい草を好んだ。北澤氏によると、い草は大変強度と耐久性が高く、50年を経ても使用に耐えるという。ノエミの家具のデザインに関して北澤氏は次のように述べている。

「ミセスは木の材質感を大切にしていました。基本的な考え方は、レーモンドの建築の5原則と同じ。シンプルでナチュラルな家具を作る。素材は無垢の木材。ミセスはフリーハンドでスケッチをして、アシスタントの女性に製図させていました。原寸を書いて、検討して、椅子であれば一脚の見本を作らせる。そして、さらにシンプルにするために、削いで行くというか、細くして行く。家具屋さんを呼んで『横繋ぎ棒の径を10ミリにしたい。どうでしょう?』『大丈夫だと思います』『じゃあ、それで』と。軽井沢新スタジオの椅子は52年経っても骨組みが持ちこたえていて、たいしたものだと思います。釘とかビスといった金物を使うと断面積がそれだけ減るけれど、ほぞを入れて組み立てるやり方だから長持ちする。それを、ミセスはわかっていたのが凄いね。い草をよって縄にして編み込み、座や背を作っています」^{文8)}

レーモンド夫妻が手がけた新潟の「新発田カトリック教会」(1965年)では、同様に教会の椅子の座面にい草編みが用いられている。現在でも信者たちが職人に習い、代々補修しながら維持している。

5.2 ノエミの鋳鉄・金属加工

ノエミは暖炉のファイヤードッグや、薪を掴むマジックハンド等の暖炉用品を、機能的であると同時に愛らしい形に製作した。当時の状況をアントニンは自伝に記している。

「第二次世界大戦以前の日本の鋳鉄、鋳鉄の職人はまことに腕が冴えていた。(中略)第二次大戦前には、私たちが建物に向けていたような創造的精神をもってデザインされたものは市場には見当らなかった。職人と製造業者は有能で、喜んで開発し、応分の価格で私たちと経験を積んだ。このような状態は第二次世界大戦まで続き、多くのデザイン分野で私たちが先駆者になる機会を与えてくれたのである。ところが戦後、私たちの基本デザインによって実施された調度品は、試作段階で高くつき、最も単価の高い計画のみに限られてしまった」^{文2)}

この仕事を担当したのは大井工場で名人と言われた大井清太郎氏で、ノエミやイサム・ノグチや吉村順三の仕事を受け、住宅用に照明器具、暖炉、暖炉金物を制作した。現在は銀座から大田区に移り大井光太郎氏が会社を引き継いでいる。当時のことを尋ねたところ、「レーモンド夫妻に会ったが詳しい記憶はない。制作費が要因で

現在は暖炉用品の依頼は余り無い。作業工程からして大変高価な仕事であることは間違いなく、ノエミのファイヤードッグは100万円は下らない」との回答を得た。

ファイヤードッグ(2台)、はさみ(1個)、十能(ちりとり)(1個)、マジックハンド(1個)、ペンダントライト(6灯。スタジオに2灯、居間に1灯、食堂1灯、客間1灯、寝室に1灯)はどれも銀座の大井工場で作られた。

5.3 ノエミのイラスト、貼り絵

ノエミは1907年にコロンビア大学の教員養成大学に入学し、2年間ファインアートを専攻し、1910年にはグラフィックデザインのスタジオをニューヨークで開設して劇場のポスターや広告やイラストレーションを手掛けている。アントニンは、ノエミのイラストについて自伝^{文2)}で以下のように述べている。「学校時代以来、ノエミは二次元のデザインにとりつかれ、のちにニューヨークでは、劇場広告用の24枚の大ポスターをつくり、タバコ会社用のポスターを制作し、実際に建物の屋根や、鉄道や地下鉄の沿線に見られる巨大な版画となった」

北澤氏によれば、絵の腕前はアントニンよりノエミの方が圧倒的に上で、結婚当初はノエミのグラフィックの収入が家計を助けていた。^{文8)}

「北澤コレクション」の中にはノエミがニューヨークで描いたイラストと、既存の書籍や作品集には見当たらない貼り絵がある。また、現在はペンシルベニア大学に貸し出しているが、ノエミがフランク・ロイド・ライトの指示で描いた孔雀の図2点を含む。

写真5-1に1913~15年にアメリカの新聞に連載したイラスト、写真5-2に貼り絵、写真5-3に孔雀の図を示す。



写真5-1 新聞「NEW YORK AMERICAN」に連載したイラスト 注1)



写真5-2 ノエミの貼り絵

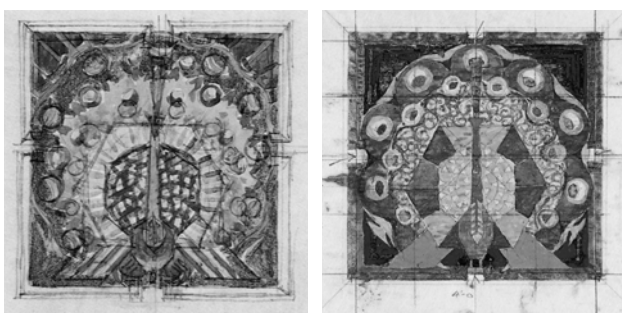


写真5-3 ライトの指示で描いた孔雀 注1)

5.4 ノエミのテキスタイル

本論文の2章において、ノエミが1941年にニューヨーク近代美術館のコンペで入賞し、サイラス・クラーク社からテキスタイルを発売したことを記した。アントニンは自伝で次のように述べている。

「もちろん当時は、適当な費用でいかなるデザインをもこなす、高度の技術を持った諸君がいた。私たちは織物や家具、他の無数の細部のデザインをすすめて、製作の指示をした。1922年から1937年の間の日本で、最初に成功した現代的とよべる織物は、ノエミがデザインしたものであったと私は信じている。織物は1947年のニューヨーク近代美術館の競技で一等賞を獲得した」「入賞作は大手メーカーによって製作と販売が約束されていた。ノエミはデザインの変更を迫られたが、受け入れずに自分の見本の良さを主張した。その織物は後に多くのデザイナーに模倣されるほど影響を与えた。このノエミの作品の模倣はしばらくの間は流行し、ついには日本にも影響をもたらすにいった」文2)

ノエミのテキスタイルはアメリカと日本で使われていた。北澤コレクションの写真と照らし合わせたところ、ノエミが1935年に銀座の家具とテキスタイルのデザイン展で発表した織物は、「軽井沢新スタジオ」のベッドカウチのカバーと一致した。また、ペンシルベニアにルイ

ス・カーンが設計したJesse and Ruth Oser House (1944年)文9)では、暖炉右手の長椅子のカバーとして使われていることを確認した。

写真5-4にノエミのテキスタイルの写真、写真5-5にルイス・カーン設計の家の長椅子の写真を示す。

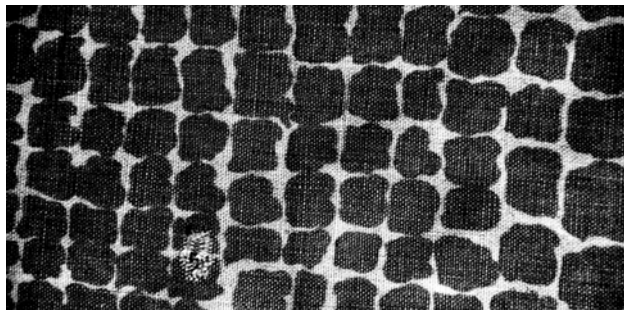


写真5-4 ベッドカウチのテキスタイル 注2)



写真5-5 ルイス・カーン設計の家の長椅子の写真 注3)

5.5 ノエミの手すき和紙

アントニンは、ノエミの取り組みについて自伝で以下のように述べている。「二次元の美術を生みかつ今でも広く行われている日本に彼女は永い間好意をよせ、その日本を本当に居心地の良い所と感じてきた。彼女は日本紙や日本の織物を用いて襖や壁をデザインしているが、私たちは今も多くの自分たちの建物に、同じデザインの手法を取り入れているのである」文2)

ノエミは襖の紙を自ら漉いた。張り合わせが多いの是一张のサイズが小さかったためである。手すき和紙は「軽井沢新スタジオ」の玄関、客間、寝室の襖および厨房の折れ戸の仕上げに用いられている。

写真5-6に厨房折れ戸と玄関の襖の手すき和紙の写真を示す。

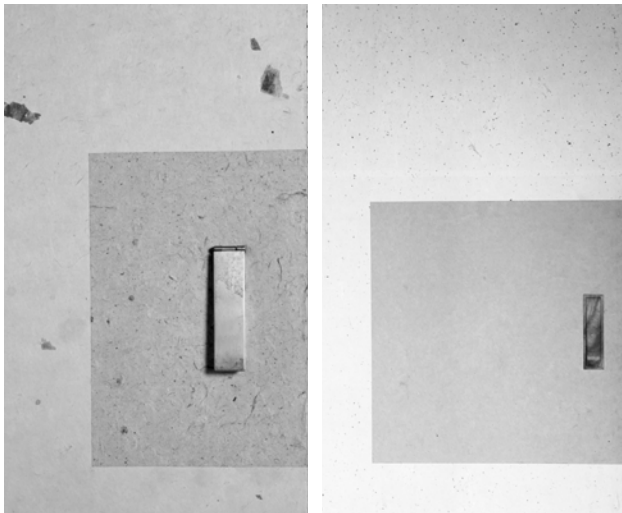


写真5-6 厨房折れ戸と玄関の襖の手すき和紙 注2)

5.6 ノエミ関連の写真

ノエミに関する写真731点を分類した。ノエミが製作した家具（602）、ノエミのテキスタイル（51）、ノエミが製作したプロダクト（11）、ノエミ自身が写るもの（66）があった。

6. ニューホープの農場

2016年3月28日、アメリカのペンシルベニアにてニューホープの農場を訪ねた。120エーカー（48.5ヘクタール）の土地には農場と「ニューホープの家」1939年とスタジオがあり、庭に鶏を放牧している。スタジオ兼自宅に、ノエミとアントニンの孫で写真家のシャーロット・レーモンド氏が家族と住んでいる。帰国前のアントニンの依頼で、日本にて北澤氏がこのスタジオの図面を引いた。かつてジョージ・ナカシマに貸し出していた「ニューホープの家」、現在はジョージ・ナカシマの工房で働く二人の職人に貸している。シャーロットと家族にレーモンド夫妻の思い出を聞いた。

1937年にレーモンド夫妻は一度日本を去った。1939年にニューホープに土地を取得し、母屋に障子と襖を入れて改造した。日本から持ち出せずに日本に残していた金で京都に注文して作ったもので、吉村順三が輸出手続きを行った。和紙こそ貼っていないものの、今でもその障子が母屋に残っている。また、1階のキッチンから3階の寝室まで、いたる所に日本を偲ばせる屏風や着物が配置してある。「食事の折には箸を使い、緑茶の急須に馴染みがある」「日本の気配はもちろんのこと、フランス、チェコ、アメリカが混ざり合った場所として家を捉えている」と家族は話す。例えば、屋根はイタリア風であり、母屋はクエーカースタイル、玄関には日本風の靴箱があり、居間にはノエミが染めた中国製のラグがある。そしてあちこちにノエミが作った彫刻、絵画、照明、椅

子が残っている。同行したウィタカー氏の説明によって年代を推測できる品もあった。維持と保存という視点から見ると、建築の保存状態は良いとはいえず、家族にとってどのように使用していくかが今後の検討課題であった。翌日に隣にあるジョージ・ナカシマの工房を訪ねたが、娘のミラ・ナカシマ氏とその家族はジョージの設計した建築群をショールームやギャラリーとして整備し、来場者に開放していた。シャーロットは、「2016年末からアーティストインレジデンスとして母屋を開放し、写真家や彫刻家やアーティストのネットワーク形成の場にしていきたい」と話す。レーモンドは活動の拠点を日本においていたため、アメリカより日本での知名度が高い。今後の日米におけるレーモンド研究の連携を望んでいた。

写真6-1に建設当時の「ニューホープの家」のインテリア、写真6-2に今回の訪問時の写真、写真6-3にスタジオにてノエミのイラストを見せる孫のシャーロットの写真を示す。

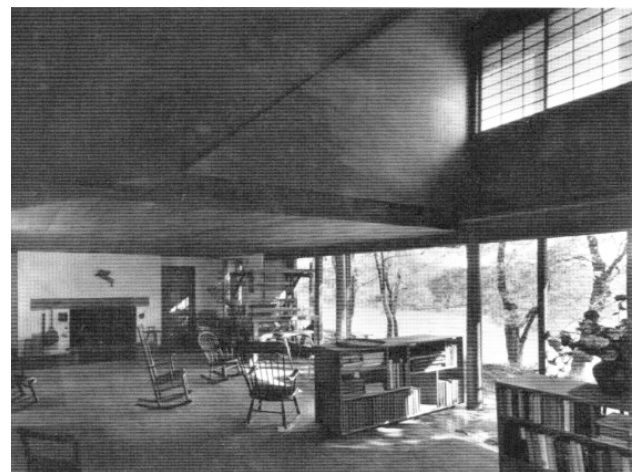


写真6-1 ニューホープの家のインテリア（1939-40年）注1)



写真6-2 ニューホープの家のインテリア（2016年）



写真6-3 ノエミのイラストを見せるシャーロット・レーモンド氏

7. 考察

「軽井沢新スタジオ」において、ノエミがデザインした家具、照明、和紙やテキスタイルなどのインテリアエレメントは、アントニンと自らの生活のためにデザインした美しい日用品である。ノエミは暮らし全体をデザインすることでレーモンド・スタイルを生き生きとしたものに仕上げた。アントニンは自伝においてパートナーのノエミを次のように評価している。

「爾来ノエミは、どんな小さな仕事でも自分の手をつけ、1970年の今日に至るまでなおも続けている。彼女の古典的なヨーロッパの教育、その家族の伝統、そしてフランス、アメリカ、日本における全般的な絵画、芸術の研究が、いささか不思議ではあるが、堅実でしっかりとした美意識と、精神的理解の基礎を築いたのである。彼女は私の靈感の源泉であり、教師であり、また永遠の価値の探求に向かって結ばれた、最も忠実な友となった」^{文2)}

ノエミのデザインはどれもたたずまいが自然であり、奇をてらうものではない。それでいてアントニンの建築や日本の風景と調和する。二人の作風にはアントニンが生まれたチェコ、ノエミが生まれたフランス、二人が師事したフランク・ロイド・ライト、設計事務所を開いたアメリカと日本、そして二人が渡航した世界各国の文化が反映されている。そして、レーモンド5原則に基づいているので、機能的かつ自然なデザインで経済性にも見合うものとして作られた。

本研究では「北澤コレクション」のアーカイブを整理すると共に、主に建築4作品「軽井沢新スタジオ」、「旧井上房一郎邸」、「新発田カトリック教会」、

「ニューホープの家」を調査した。価値ある建築およびインテリアを後世に伝えるには、作品への理解を深め、維持と補修の費用を鑑みながら、継承し運営する組織づくりが不可欠である。アメリカの「ニューホープの家」では遺族がレーモンド夫妻の取組みを改めて発信し、アーティストインレジデンスとして公開しようとしている。また、「レーモンド自邸」の建築とインテリアをほぼ完全に写した群馬県高崎市の「旧井上房一郎邸」は、高崎美術館の管轄となった。今も竣工した大工にインタビューを行い整備と保存を進め、一般に公開している。

「新発田カトリック教会」では信者がい草編みを修得し、ノエミの椅子を大事に補修している。そして北澤氏が管理する「軽井沢新スタジオ」ではすべてを当時のままに残すと決め、維持管理を行っている。今回、ノエミの資料の中から、フランク・ロイド・ライトやルイス・カーンと関わる資料を発見した。「北澤コレクション」は同時代の建築家の資料としても価値がある。今後はアントニンとノエミの日米における位置づけをさらに明らかにしたい。

<注>

- 1) 写真2-1, 4-1, 5-1, 5-3, 6-1は「北澤コレクション」
- 2) 写真4-2, 4-3, 5-4, 5-6は齋藤さだむ撮影
- 3) 写真5-5は参考文献⁹⁾より転載

<参考文献>

- 1) 三沢浩：おしゃれな住まい方 レーモンド夫妻のシンプルライフ, 王国社, P.6, 2012
- 2) アントニン・レーモンド, 三沢浩訳：自伝アントニン・レーモンド, 鹿島研究所出版会, p.296, p.290, p.298, p.300, 1970
- 3) Kurt G. F. Helfrich, William Whitaker: Crafting a Modern World The Designs of Antonin and Noemi Raymond, Princeton Architectural Press, P.266-275, 2006
- 4) 鈴木 敏彦, 杉原 有紀：北欧の巨匠に学ぶデザイン アスブルンド/アールト/ヤコブセン, 彰国社, 2013
- 5) 鈴木敏彦, 松下希和, 中山繁信：世界で一番美しい建築デザインの教科書, エクスナレッジ, 2011
- 6) NICHE編集部：NICHE 03, Opa press, p.188-263, 2016
- 7) 鈴木敏彦, 吉村行雄：ヤコブセンの建築とデザイン, TOTO出版, 2014
- 8) NICHE編集部：NICHE mook 02, NICHE, p.184, p.226, 2015
- 9) George H. Marcus, William Whitaker : THE HOUSE OF LOUIS KAHN, p.76, Yale University Press, 2013